

# 『とはずがたり』『飛鳥井雅有日記』の尊敬語

末吉温子

はじめに

『とはずがたり』（一三〇八一—一三二三年成立）は、地の文では、全体に擬古文的な文章で書かれており、会話文でも擬古文ではあるが所々に中世の特徴が見られる。消息文は候体であり中世的であるといえる。『飛鳥井雅有日記』（一二六八一—一二八三年成立）は男性による仮名日記で地の文においては全体に擬古文であるが所々に漢語が見られ、会話文においても擬古文である。消息文はない。この二作品は同時代の日記であり、どちらも敬語の面では中世の特徴を含んだ作品であると言える。そこでこの二作品を中心に中世の敬語の考察を行いその使用状況

や形式などを明らかにしたいと思う。

これまでの『とはずがたり』における敬語の研究は、そのほとんどが特定の語彙についての研究であり、全体的に敬語を扱った論文としては青柳好信氏の「敬語の研究（四）『とはずがたり』の敬語」（『栃木県立足利高校研究収録』九 昭六一年）のみである。『飛鳥井雅有日記』についての敬語に関する研究は見られない。

敬語の研究をあたりに、尊敬語・謙讓語・丁寧語に分類してそれぞれ特徴的であると思われる語について考察を行なうが今回は尊敬語についてのみ発表する。（謙讓語・丁寧語については「論叢」第15号に発表した。）それをさらに「地の文」、「会話文」、「消息文」、「和歌、縁起」に分類し、考察を試みた。

分類するにあたり、便宜上テキストで「……」で囲まれている部分を「会話文」、「文あり」や「文遣はず」などの語があるものを「消息文」とした。その他を「地の文」として分類した。

右に中世の特徴と述べたが尊敬語におけるその用法としては、単純形容詞に「御」を冠した用法、尊敬語に「あり」や「なる」を伴う用法などがあり、また尊敬の補助動詞なども「る・らる」の隆盛によってその様相を変えつつある。

なお登場人物の地位・身分については次のように分類した。人物が二人以上の場合はその中で一番身分の高い者を取りあげた。

「とはすがたり」

A 皇族

a 1 天皇

a 2 春宮

a 3 後深草院

a 4 龜山院

a 5 有明の月

a 6 その他

B 関白・大臣

b 1 関白・大臣

「飛鳥井雅有日記」

A 皇族

a 1 天皇

a 2 東宮

a 3 後深草院

a 4 龜山院

a 5 その他

B 関白・大臣

b 2 近衛大殿

C 公卿

c 1 公卿

c 2 雪の曙

D 殿上人

E 女房

F その他

C 公卿

D 殿上人

E 女房

F その他

f 1 神仏

f 2 その他

f 1 神仏

f 2 その他

なお「とはすがたり」は今のところ書陵部本のみであり、テキストには福田秀一校注 新潮日本古典集成「とはすがたり」を用いた。「飛鳥井雅有日記」は「仏道の記」、「嵯峨の通ひ」、「最上の河路」、「都の分かれ」、「春の深山路」の五作品からなり、前半四作品は「飛鳥井雅有卿記事」として纏められ、天理図書館蔵本（一八〇〇年書写のみ）が現存。「春の深山路」は宮内庁書陵部蔵本（一七八〇年書写）・平野神社蔵本（同）・内閣文庫本（未詳）の三本が現存し、テキストとして中田祝夫監修 水川喜夫著『飛鳥井雅有日記全釈』（風間書房）を用いた。またこれに従ってタイトルにも用いたが「飛鳥井雅有卿記事」と「春の深山路」を纏めて「飛鳥井雅有日記」と称するこ

とにする。

## 1 「御十形容詞」

この用法については山田孝雄氏の研究以来、中世では、名詞に「御」を冠するもののみで、まだ單純形容詞に直接「御」を冠した用例は行なわれていなかったとされてきた。和田利政氏も山田氏の説を受けて、「覚一本の成立(十四世紀中葉)ないしはそれ以後の転写のころに、「御」が冠せられた。」と述べておられる。

これらの説に対して、近藤政美氏は、鎌倉時代後期には、行われはじめており、「御・単なる形容詞」という表現は連用修飾語からはじまったと考えられてきたが、鎌倉時代に成立した諸本には連用形や已然形の用例が散見される、と述べておられる。「飛鳥井雅有日記」には、「御十形容詞」の用例は一例のみであり、しかも單純形容詞ではない。

① 御歌のことも評定あり。白日までは御心もとなし。

(春)

「とはすがたり」には「御十形容詞」の用例が、「地の文」に七語一〇例、「会話文」に三語五例見られ、「消息文」には見ら

れなかった。このうち單純形容詞に「御」を冠した用例は七語一一例あった。

(地の文)

② あらたまの年ともにも、(法皇ガ)なほ御わずらはしければ、(卷一)

③ 次第に(有明ノ月ガ)御煩はしなど申すを聞き参らせしほどに、(卷三)

④ (院ハ)女院の御方へなりぬにや、立たせおはしましぬるは、いかでか御恨めしくも思ひ参らせざらん。(卷三)

⑤ 祝詞の師といふは神にことさら御むつまじく宮仕ふ者なりといふが参りて、(卷四)

⑥ (東二条院ノ)今はの御事も、変るまじき御事かところ思ひ参らするに、などやなど、御おぼつかなくおほえさせおはしまししほどに、(卷五)

⑦ 何となく御所さまの御やうも御ゆかしくて、見参らせに参りたれば、(卷五)

⑧ 人知れず、今や落ちさせおはしましぬると承ると思ふ程に、(院ハ)御わずらはしうならせおはしますすとて、

(卷五)

(会話文)

⑨ (院方雅忠二)「御幼くより慣れ仕りに、……」(巻

一)

⑩ (二条ケ院二)「御いたはしければ、御使な給ひそ」

(巻一)

⑪ (院方御上臥シタル人二)「御人少なるも御いたはしく

て、御宿直し侍る」(巻一)

⑫ (二条方遊義門院二)「いまだ御幼く侍りし昔は、慣れ仕

うまつりに、」(巻五)

「転写の際に付加された」と考へるには全体の割合から考へると用例として多過ぎるのではない。また「平家物語」にも、「御いたはしう 御恋しく 御恋しう」など單純形容詞に「御」を冠した用例が僅かではあるが見られることから、この当時すでに單純形容詞に「御」を冠した用法が用いられていたと考へるであらう。また活用形においても已然形が二例、終止形が一例見られる。

使用対象を見ると二例を除いて全てAランクで用いられており、かなり敬度の高い敬語と考へるであらう。また「会話文」に用いられた用例五例のうち四例までが單純形容詞に「御」を冠した用例であり、「消息文」に用例が見られなかったことか

らもこの用法は「話(ことば)的であったと考へられるのではないだろうか。

注一 山田孝雄「平家物語の語法」(『国語史料鎌倉時代之部 平家物語につきての研究 後編』文部省 大三年二月)

注二 和田利政「ことばすがたり」の敬語——御十形容詞・覚え給ふ」『国学院雑誌』六八・一二 昭四二年二月

注三 近藤政英「平家物語諸本における形容詞の敬語表現について」『平家物語総索引』金田一春彦・清水功・近藤政英編 学

習研究社 昭四八年四月

注四 金田一春彦・清水功・近藤政英編「平家物語総索引」(岩波

日本古典文学体系「平家物語」学習研究社 昭四八年四月

2 「尊敬語十あり」「尊敬語十なる」

この用法も中世敬語の特徴であるが、この用法について山田

孝雄氏は、次のように分類されておられる。(ただしa i e の

記号は著者による。)

「ナル」はその事おのづから生るの義なるが、上に尊貴

の人の行為なることをあらはす名詞を伴ふ時に相保合して

こ、に一種の敬語をなすに至るものとす。

- a 漢語の尊敬名詞十なる
- b 名詞十助詞又は修飾語十なる
- c 名詞二十なる

「アリ」は或いは本来の存在の意義を以て、或は、汎く動詞の叙述の力のみを代表して、その上に来るところの名詞と相保合して一種の敬語となすことあり。

とし、上接語に尊敬の意を表わす場合と表わさない場合があるとして、前者の場合、

- a (御十) 名詞十あり
- b 御十動詞の連用形十あり
- c (C) 漢語の尊敬名詞十あり  
(C) 御十漢語名詞十あり
- d 名詞十助詞十あり
- e 御十副詞十あり

この山田氏の説を参考に、「地の文」において使用対象をも含めて分類したのが表一であるが、aとcでは重複する部分がある。そこで、便宜上aを和語、cを漢語として分類した。またここではあり系のeの副詞を受けるものはなかった。用例数は「あり系」が一五四例、「なる系」が三六例あり、それらの使用対象は「あり系」の六例を除いて全てAランクの人に使用

されており、最高敬語と言えるであろう。

上接語については、「あり系」は、一五四例のうち三〇例が「往来関係」であり、六九例が「言語関係」である。これ以外の上接語には特にきまりはなく種々の語に付くようである。「なる系」は三六例中、二五例までが「往来関係」であり、これらは全用例数の半数以上をしめており、ある種の傾向が伺える。

敬度については、表一の「尊敬語十あり」と「尊敬語十なる」を見ると、後者がAランクのみに使用されているのに対し、前者は最下限はB・Cランクにまで及んでいる。しかしその中には「御文あり」や「御心ざしあり」「御教書あり」などがあり、これだけでは敬度の差を述べることはできない。また同じ上接語を持つ語（「御幸」「還御」等）で比べてみても、使い分けはないように思われる。

「会話文」「消息文」においても上接語・敬度について見てみる(表二参照)。「消息文」では用例はない。また「尊敬語十なる」は一例見られるのみである。「尊敬語十あり」の上接語については、前述したように「往来関係」「言語関係」に多いと言えそうである。また敬度については、表二の7・10のように二条や雪の曙に用いられた用例があるが、7は身分差が大きい

表一 飛鳥井雅有日記

(地の文)

No. 1

		A 皇族					B 關白 大臣	C 公卿	D 殿上人	E 女房	F その他		計	備考
		a1 天皇	a2 東宮	a3 後深草院	a4 龜山院	a5 その他					f1 神仏	f2 その他		
往 来	御参あり					1							1	b
	出御あり	5	4										9	c <sub>1</sub>
	入御あり		1										1	c <sub>1</sub>
	御幸あり			1									1	c <sub>2</sub>
言 語	御物語あり	1	1										2	a
	仰言あり		3										3	a
	仰あり	4	12	2									18	b
	御尋ねあり		5										5	b
	御沙汰あり	2	6	5									13	c <sub>3</sub>
	御気色あり				1								1	c <sub>3</sub>
	御談義あり		2										2	c <sub>2</sub>
	御返事あり			1									1	c <sub>2</sub>
	御歌合あり		1										1	a
	御目あり			1									1	a
	御鞠あり	5	2		1								8	a
	御文あり					1							1	a
	御使あり		1										1	a
	御会あり	1											1	a
	召しあり	1	4										5	b
	御立あり				1								1	b
	御定あり			1									1	b
	御遊びあり	1	1										2	b
	御覧あり			1									1	c <sub>2</sub>

(備考欄の a ~ c は山田氏の分類による)

表一 飛鳥井雅有日記

(地の文)

No. 2

		A 皇族					B 関白 大臣	C 公卿	D 貴上人	E 女房	F その他		計	備 考
		a 1	a 2	a 3	a 4	a 5					f 1	f 2		
		天皇	東宮	後深 草院	龜山院	その他					神仏	その他		
	御感あり	1										1	c <sub>2</sub>	
	御遊あり		1									1	c <sub>2</sub>	
	御興あり		2									2	c <sub>2</sub>	
	御勝負あり	1										1	c <sub>2</sub>	
	御教書あり						1					1	c <sub>2</sub>	
	御歌沙汰あり		1									1	c <sub>2</sub>	
	御歌会あり		1									1	c <sub>2</sub>	
	尊敬語+あり	22	48	12	3	1	1					88		
往 来	御幸なる				3	1						4	a	
	行幸なる	1										1	a	
	還御なる				1							1	a	
	御登になる		1									1	c	
	尊敬語+なる	1	1		4	1						7		
	「御」+名詞+「候ふ」		1									1	御制候ふ (製) c <sub>2</sub>	

表一 とはずがたり

(地の文)

No 1

		A皇族					B 関白・入道		C 公卿		D 殿上人	E 女房	F その他		計	備考	
		a1	a2	a3	a4	a5	a6	b1	b2	c1			c2	f1			f2
		天皇	東宮	後深 皇院	龜山院	有明 の月	その他	関白 大臣	近衛 大臣	公卿			常の 朝臣	侍从			その他
往 来	御参りあり			1		3	3		2					9	㊦ ㊧ b		
	御渡りあり			2		1	3							6	㊦ ㊧ ㊨ b		
	御上りあり						1							1	㊦ b		
	御捲りあり						1							1	㊦ b		
	御とどまりあり			1										1	㊦ b		
	御出であり					1								1	㊦ b		
	還御あり			2										2	㊦ c <sub>1</sub>		
	行啓あり		1											1	㊦ c <sub>1</sub>		
	御幸あり			4	1		1							6	㊦ ㊧ ㊨ c <sub>1</sub>		
	御逗留あり			1										1	㊦ ㊧ c <sub>1</sub>		
御参りもあり							1						1	㊦ d			
言 語	御物語あり			5										5	㊦ ㊧ a		
	仰言あり			1		1	1							3	㊦ ㊧ ㊨ a		
	仰あり			27	1	1	4							33	㊦ ㊧ ㊨ ㊩ b		
	御尋ねあり			8			1							9	㊦ ㊧ ㊨ ㊩ b		
	御沙汰あり	1		2										3	㊦ ㊧ ㊨ c <sub>1</sub>		
	御気色あり			8			3							11	㊦ ㊧ ㊨ ㊩ c <sub>1</sub>		
	御返事あり						1							1	㊦ c <sub>1</sub>		
	御物語などあり			2										2	㊦ ㊧ ㊨ d		
	御尋ねなどあり			1										1	㊦ d		
	御気色のみあり	1												1	㊦ d		
	御鞠あり		1	1	1									3	㊦ a		
	御文あり				1	2	1		1	1				6	㊦ ㊧ a		

(○数字は巻数)



表一 とはずがたり

(地の文)

No.2

	A皇族						B 同白・大皇		C 公卿		D 殿上人	E 女房	F その他		計	備考
	a1	a2	a3	a4	a5	a6	b1	b2	c1	c2			f1	f2		
	天皇	東宮	後深 及院	龜山院	有明 の月	その他	同白 大皇	近衛 大輔	公卿	常の司			神仏	その他		
御使あり			2											2	㊦ a	
御盃あり			1											1	㊦ a	
御酒盛あり		1												1	㊦ a	
御会あり	1													1	㊦ a	
御遊びあり			1											1	㊦ b	
御負けあり			1											1	㊦ b	
御勝ちあり			1											1	㊦ b	
御心ざしあり				1					1					2	㊦ b ㊦ b	
御方分ちあり		1												1	㊦ b	
御勤めあり			1											1	㊦ b	
御しつらひあり						1								1	㊦ b ㊦ b	
御占ひあり			1											1	㊦ b	
召しあり	1		8											9	㊦ ㊦ b ㊦ b	
御感あり			1											1	㊦ c <sub>1</sub>	
御遊あり			1											1	㊦ c <sub>1</sub>	
御座あり		1												1	㊦ c <sub>1</sub>	
御拝あり			1											1	㊦ c <sub>1</sub>	
御念誦あり					1									1	㊦ c <sub>1</sub>	
御対面あり	1		1		1	1								4	㊦ c <sub>1</sub> ㊦ c <sub>1</sub>	
御述懐あり						1								1	㊦ c <sub>1</sub>	
御出家あり			1											1	㊦ c <sub>1</sub>	
御巡礼あり			1											1	㊦ c <sub>1</sub>	
御仏事あり						1								1	㊦ c <sub>1</sub>	

表一 とはずがたり

(地の文)

No.3

		A 皇族						B 同白・大臣		C 公卿		D 殿上人	E 女房	F その他		計	備考
		a1	a2	a3	a4	a5	a6	b1	b2	c1	c2			f1	f2		
		天皇	東宮	攝政 皇院	皇血保	有司 の月	その他	同白 大臣	近衛 大臣	公卿	官の 頭			神仏	その他		
御供養あり						1									1	㊦ c <sub>1</sub>	
御結願あり			1												1	㊦ c <sub>1</sub>	
御伺候あり					2										2	㊦ c <sub>1</sub>	
御約束あり			1												1	㊦ c <sub>1</sub>	
御式どもあり			1												1	㊦ d	
御神楽・御手遊び さまざまあり						1									1	㊦ d	
御とぶらひどもあり			1												1	㊦ d	
御心ざしさへあり					1										1	㊦ d	
御とのごもりてあり			1												1	㊦ d	
尊敬語+あり	5	4	94	4	15	26		4	1	1					154		
往 来	御幸なる			5	2	2									9	㊦ ㊦ ㊦ a	
	御幸なせおはします					1									1	㊦ a	
	還御なる			7	1	1	1								10	㊦ ㊦ ㊦ a a	
	御上りなる					1									1	㊦ a	
	御下り近くなる					1									1	㊦ b	
	御幸さへなる				1										1	㊦ b	
	行幸~なる	1													1	㊦ b	
	行啓~なる		1												1	㊦ b	
崩 御 な る	崩御なる			1		1									2	㊦ ㊦ a	
	御精神なる			1											1	㊦ a	
	御産なる					1									1	㊦ a	
	御寝なる			1											1	㊦ a	
	御寝になる			5											5	㊦ ㊦ c	

表一 とはずがたり

(地の文)

No. 4

	A 皇族						B 関白・大臣		C 公卿		D 殿上人	E 女房	F その他		計	備考
	a1	a2	a3	a4	a5	a6	b1	b2	c1	c2			f1	f2		
	大皇	東宮	後深草院	龜山院	有明の月	その他	関白大臣	近衛大臣	公卿	その他			神仏	その他		
御事になる						1								1	㉞	
尊敬語+なる	1	1	19	5	1	9								36		
御事なし			1											1	㉞	
御名残なし					1									1	㉞	
御形見なし			1											1	㉞	
尊敬語+なし			2		1									3		
御幸なす			1											1	㉞	
おぼしめしなす			1											1	㉞	
尊敬語+なす			2											2		

卷一(8)				飛鳥井雅有日記(4)					卷
9	8	*7	6	5	4	3	2	1	
大宮院	後深草院	乳母	大宮院	後深草院	人	定(右大臣) 正二位 雅	安察殿	人	話し手
"	後深草院	二条	後深草院	斎宮	東宮	龜山院	"	東宮	為手
		乳母	大宮院						受け手
後深草院	"	二条	後深草院	斎宮	"	"	"	雅有	聞き手
1	1	1	1	1	1	1	1	1	数
御遊びあり b	御寝みあり b	御母ねあり b	御渡りあり b	御掃りあり b	御会あり a	御鞠あり a		御沙汰あり c <sub>2</sub>	備考

「尊敬語+あり」(会話文)と28例  
飛4例

(表二)  
と考えられるし、10についても「有明の月」説もあるが、ここで「雪の曙」と解しても、二条が男に強く想願している場面で、「会話文では表現主体の心理条件によって敬語の使用がかなり影響される」と考えられる。

卷二(13)													12	*11	*10
24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	*11	*10	
近衛大殿	女童	人々	後深草院	龟山院	公卿達	"	二条	伊予殿	"	"	隆顯大納言	有明の月	後深草院	二条	
"	"	"	"	"	"	"	"	"	後深草院	"	有明の月	"	後深草院	雪の曙	
	二条		公卿達	龟山院		"	"	"	二条	"	後深草院		童宮		
二条	後深草院	人々	公卿達	"	後深草院	女童	近衛大殿	"	"	"	二条	後深草院	二条	雪の曙	
1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	
御寝にてあり d	召しあり b	御壺合せあり b	御あがなひ あり b	御負けあり b	御せあり b	(5)			御尋ねあり b	御掃りあり b	御参りあり b	御大事あり c <sub>1</sub>	御見参あり c <sub>2</sub>	御心ざしあり b	

( ) …消息文

— 旨 語 —

往 来

卷一(2)	卷	「尊敬語十候ふ」 (会話文) 3例	
2	1	話し手	聞き手
"	大宮院	為手	受け手
"	後深草院		
"	後深草院	聞き手	聞き手
1	1	数	備考
御つとめ候ふ b	御物語候ふ a		

卷(1)	卷	「尊敬語十なる」 (会話文) 1例	
1		話し手	聞き手
雅忠大納言	後深草院	為手	受け手
二条		聞き手	聞き手
1		数	備考
御幸なる a			

卷五(2)	卷三(5)				卷	「尊敬語十あり」	
30	29	28	27	26	25		
父の靈	男	大宮院 (東二条院)	龟山院	人々	楊梅中將 兼行	話し手	
"	"	後深草院	朱雀院	春日の御樹	後深草院	為手	
						受け手	
"	二条	二条 (大宮院)	後深草院	人々	二条	聞き手	
1	1	1	1	1	2	数	
御膳物あり a	御通りあり b	御事どもあり d	御許されあり b	御掃座あり c <sub>1</sub>	御幸あり (2)c <sub>2</sub>	備考	

往 来

往 来

卷二(1)	3	近衛大殿	"	中納言中 将兼忠	"	1	御許され候 b
-------	---	------	---	-------------	---	---	------------

「尊敬語+なし」(会話文) 2例

卷		話し手	為手	受け手	聞き手	数	備考
卷四(1)	1	平入道の 御前の	御服所の 人々		二条	1	御暇なし a
卷五(1)	2	父の壺	後深草院		"	1	御誤りなし b

「尊敬語+候ふ」(消息文) 1例

卷一(1)	1	書き手	為手	受け手	読み手	数	備考
		後深草院	東二条院		東二条院	1	御心得候ふ a

また山田氏の分類で「尊敬語+あり」のdや「尊敬語+なし」のb・cの、尊敬語と「あり」「なし」の間に助詞や修飾語等が入る形式は「飛鳥井雅有日記」で後者に一例、「とはすがたり」では「地の文」で前者が九語十例、後者が六語十例、「会話文」で二語二例見られた。

「飛鳥井雅有日記」

(地の文) 「なる系」 「御昇になる」 一例

「とはすがたり」

(地の文) 「あり系」

「御参りもあり」一例、「御物語などあり」二例、「御尋ねなどあり」一例、「御気色のみあり」一例、「御式ともあり」一例、「御神楽・御手遊さまざまあり」一例、「御とぶらひどもあり」一例、「御心ざしさえあり」一例、「御とのごもりてあり」一例。

「なる系」

「御下り近くなる」一例、「御辛さへなる」一例、「ます行幸。丑三つばかりになる。」一例、「春宮の行啓は、いまだ明き程にや、二条殿へなりぬれば、」一例、「御寝になる」五例、「御事になる」一例。

(会話文)

「あり系」 「御寝にてあり」一例、「御事ともあり」一例。

またこの用法は「平家物語」にも多数見られる。「尊敬語+あ

り」や「尊敬語十なる」が平安後期に発生し、鎌倉時代に広く用いられたとされてお<sup>り</sup>、その発達した形の一つであろう。「飛鳥井雅有日記」に用例が少ないのは、文体的なことと関わりがあるのだろうか。この用法は、「地の文」に多く「消息文」には全く用いられていない。また「とはすがたり」に「尊敬語十なる」に「いせおはします」の伴った「御幸ならせおはします」という例が見られる。

ここで「尊敬語十あり」と「尊敬語十なる」について纏める。

(1) 「尊敬語十あり」は、「往来関係」「言語関係」の語に多く、「尊敬語十なる」は「往来関係」の語に多い。

(2) 敬度についてはどちらもAランクを使用対象とする最も高敬語であると言える。

(3) 両者の敬度による使い分けは、「とはすがたり」と「飛鳥井雅有日記」においてはな<sup>い</sup>ようである。

また①「尊敬語十候ふ」や②「尊敬語十なし」③「尊敬語十なす」の形が見られる。①は「尊敬語十あり」の丁寧語(注四)であり、使用対象と聞き手が同一人物の場合に使用される<sup>注五</sup>。かなり敬度が高いと言える。②は「尊敬語十あり」の否定形である。③は「尊敬語十なる」が「ナサル」の意で用いられるのに対して、「敬語名詞十なす」は下に謙譲の補助動詞「奉る」

を伴って、「貴人に、なさるようにおすすめ申し上げる」意の謙譲表現に用いられる(注四)とされているが、ここでは「奉る」を伴った用例はない。また意味については、「おほしめしなす」には「おすすめ申し上げる」意はない。これは「尊敬語十なす」であって、敬語名詞ではないからであろう。

注一 山田孝雄 「平家物語の語法」 文部省 大三年二月

注二 福田秀一校注 新潮日本古典集成 「とはすがたり」 新潮社 昭五三年九月

注三 渡辺英二 「謙譲語の性格 — 枕草子を資料として —」

「国語国文研究」四八 北大国文学会編集 昭四六年一〇月

注四 三浦和雄 「複合語の敬語動詞 — 「敬語名詞」に「あり」候ふ「なる」の複合した敬語動詞について —」 「国文学」五・二 昭和三五年一月

注五 桜井光昭 「敬語論集 — 古代と現代 —」(「古事談」の尊敬語) 明治書院 昭五八年四月

### 3 尊敬の補助動詞「い給ふ」「いせ(させ)給ふ」「いせ(させ)おはします」を中心

「とはすがたり」に関する尊敬の補助動詞の用法については若林氏・宮内氏・新免氏・川崎氏・青柳氏の研究があり、その内容を纏めると、「いせ(させ)給ふ」と「いせ(させ)おは

「します」は同一次元で考えられない。敬度は「いせ(させ)おはします」↓「いせ(させ)給ふ」↓「給ふ」↓「る・らる」の順である。「いせ(させ)おはします」と「いせ(させ)給ふ」の使い分けについては、よりトップクラスの人物に「いせ(させ)おはします」を用いる説と心理的に隔たっている場合には「いせ(させ)給ふ」を、より親しいと感じる場合には「いせ(させ)おはします」を用いる説の二説があると言える。使用状況は(表三参照)、「地の文」では、使用対象の下への広がりを見ると「い給ふ」↓「いせ(させ)給ふ」↓「いせ(させ)おはします」の順に敬度が高くなっていると言える。また神仏に対しては、「い給ふ」で待遇している。「い給ふ」と「る・らる」はAランクからFランクまでその使用対象は幅が広い。

### (一) 「い給ふ」

表三を見ると、「とはすがたり」でAランクの天皇に用いた例が見られる。

① さて、安芸国嚴島の社は、高倉の先帝も御幸し給ひける、跡の白波もゆかしくて、(卷五)

これは過去の天皇であり、「とはすがたり」では過去の人物に

対しては待遇の敬度が低くなる傾向があるとされているが、その用例と考えられるであろう。「飛鳥井雅有日記」では、

② 昔神功皇后の御代に、忍熊の王の謀叛によりて、武内大臣追ひきて、ここにて行き違ひて打ちたりしより、逢坂とは申由、日本紀には見えたり。(春)

③ 昔帝の御娘を盗みて、東へ逃げ下る者の、(春)など全く敬語を用いていない用例が見られる。また、

④ 仁徳天皇と東宮(と)位を互いに譲りおはしまし、事も思ひ出られて、(春)

のように「いおはします」で待遇されている例もあるが、これも本来ならば「譲らせおはします」であり、いずれにしても現時点より敬度が低いようである。従って「とはすがたり」だけでなく「飛鳥井雅有日記」においても、過去の人物に対しては待遇が低くなる傾向があると言える。Fランクの $f_2$ の人物について見てみると、

「とはすがたり」

(卷四) 源氏、真喜僧正、一禰宜高良、雷。

(卷五) 人麿。

「飛鳥井雅有日記」

(春) 阿仏尼、役行者、將軍の妻。

表三-2 とはずがたり

(地の文)

No.1

		A 皇族						B 関白・大臣		C 公卿		D 殿上人	E 女房	F その他		計	備考
		a1	a2	a3	a4	a5	a6	b1	b2	c1	c2			f1	f2		
		天皇	東宮	攝政 皇孫院	皇山院	有明 の月	その他	關白 大臣	近衛 大臣	公卿	家の 頭			神仏	その他		
い 給ふ	卷1			26			25			4	10		1	1		67	
	2			11		22	2		4	1						40	
	3			18	3	31	2	2	2	3	1			1		63	
	4			1			10							7	4	22	1. 番 1. 例あり 276p③
	5	1		4			4	1		2	2			4	1	19	
	計	1		60	3	53	43	3	6	10	13		1	13	5	211	
い せ な せ 給ふ	1		1	22			13									36	
	2			12	3	4	1		2							22	
	3		1	12	3	3	3							1		23	
	4						1									1	
	5			4												4	
	計		2	50	6	7	18		2					1		86	
い せ な せ お は し ま す	1			16			5									21	
	2		2	16	2											20	
	3		1	9												10	
	4			9			2									11	
	5			12	3		35							1		51	
	計		3	62	5		42							1		113	
る ら る	1			12			5			17	12		2		4	52	
	2		3	10	2	1	1		1	10	7		1		3	39	
	3	5	4	28	5	11	13	3	1	2	6					78	
	4			6			3			3			3	1	4	20	
	5			3			8			4	3					18	
	計	5	7	59	7	12	30	3	2	36	28		6	1	11	207	



表三-1 とはずがたり

(地の文)

No.1

		A 皇族						B 四位・大臣		C 公卿		D 殿上人	E 女房	F その他		計	備考
		n1	n2	n3	n4	n5	n6	b1	b2	c1	c2			f1	f2		
		天皇	皇宮	後深草院	龜山院	有明の月	その他	四位大臣	近衛大臣	公卿	その他			神位	その他		
とはずがたり	～給ふ	1		60	3	53	43	3	6	10	13		1	13	5	211	
	～せ(させ)給ふ		2	50	6	7	18		2					1		86	
	～せ(させ)おはします		3	62	5		42							1		113	
	る・らる	5	7	59	7	12	30	3	2	36	28		6	1	11	207	
飛鳥井雅有日記	～給ふ		3				7					2	1	2	3	18	
	～せ(させ)給ふ	1	2	4	1		2	1								11	
	～おはします	1	1													2	
	～せ(させ)おはします	4	4	5												13	
	る・らる	21	51	18	1			3		18		2	9		7	130	

	飛(2)	巻
3	*1	
大宮院	為家大納言	話し手
後深草院	童宮	為手
		受け手
後深草院	二条	聞き手
1	1	2
踏み	寝	渡り
		備考

表四  
く給ふ(会話文) 飛2例  
と56例

らえている。

と「飛鳥井雅有日記」では敬語表現を用いず自然現象としてとらえている。

⑥ 申の申程より俄に雲立乱れ、風荒くして、夕立す。神鳴りおどろくしくして、氷菓やうの程して降る。(飛 嗟)

ここで雷については、神秘的なものいわゆる「神鳴り」としてとらえられていると考えられる。

⑤ さても、二見浦はいづくの程にか。御神心をとどめ給ひけるもなつかしく。」など申すに、しるべ給ふべき由申して、宗信神主といふ者をつけたり。具して行くに、清清、蒔絵の松、雷の蹴裂き給ひける石など見るより、佐美明神と申す社は渚におはします。(と 巻四)

とある。

卷二(5)				卷一(3)										
*17	16	*15	14	13	12	11	10	9	8	7	*6	5	4	
二条	真願望	雪の曙	隆顕大納言	乳母	二条の使	童	前駆者	真願望	"	二条	"	雪の曙	往生院の長老	
ささがにの女	雪の曙	二条	有明の月	後深草院	二条	雪の曙	雅忠大納言	"	雪の曙	後深草院	二条	伊勢の神	後嵯峨院	
後深草院	真願望													
ささがにの女	雪の曙	"	二条	御父	後深草院	二条	雅忠大納言	二条	雪の曙	後深草院	"	二条	後嵯峨院	
1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	
参り	尋ね入り	隠れ	向ひ出で	忍び	望し	お立ち	見え	訪ね	帰り	隔て	見送り 入れ	許し	とどめ	

卷三(3)												
30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	*20	*19	18
二条	後深草院	稚児	?	"	二条	"	二条	有明の月	"( )	"	"	後深草院
"	八幡大菩薩	有明の月	有明の子	仏	生身二転の釈迦	"	有明の月	神	有明の月	柿本僧正	京極御息所	有明の月
							後深草院					
後深草院	"	二条		仏	生身二転の釈迦	生身二転の釈迦	有明の月	"	"(有明の月)	"	"	二条
1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	2	1	6
照し	知らせそめ	着換・曇み	露消え	入れ	しるべし	迷ひ	待ち参り	なし	推し置り	力尽して 身捨て	残し	探り・知り・思 つづみ・何候 し・忘れ

( )…二重会話

卷五(12)							卷四(8)					
43	42	*41	40	39	38	37	36	35	34	*33	32	31
男	人々	船の内なりし女房の上	広沢与三入道	実兼の家人	"	二条	父の靈	人々	飯沼左衛門尉	"	宮人	"
二条	後深草院	"	二条	実兼	平中納言のゆかりある女房	北野・平野	隆顕	(将軍) 惟康親王	"	二条	伊勢の神	御神(倭姫命)
二条	人々	二条	人々	二条	平中納言のゆかりある女房	北野・平野	二条	人々	"	"	二条	一畑宣尚良
2	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1
行き	御事切れ	落ちとどまり	詠み	出で	見せ	転じ代へ	詠み	出で上り	発ち	くたびれ	許し	とどめ

46	45	44
村人の小法師	村人(小法師)	事よろしき僧
小法師	坊主	"
"(小法師)	"(今の小法師)	"
1	1	1
いざ	叫り	嘆き

次に「会話文」については、五六例見られ、上は院から下は女房・僧に至るまで幅広く使用されている。「話し手へ為手」の関係において使用されるのを原則とするが、いくつかの例外がある。

⑦ (為家)「昔は雲の上の光をのみ見慣らひ侍りき。中頃は葎の門に鎖し籠り侍りしかども、猶情ある人、自ら訪ひくる人侍りしに、今となりては、老を憎むにや、言問ふ人もなくて、今宵も淋しく眺めて、独り侍りつるに、(雅有方)渡り給へるにこそ、更に昔恋しく思ひ出る事多くて、……」(飛 嗟 表四・一)

これは大納言為家(正二位)が為手||雅有(当時正四位下)に用いた用例である。この聞き手は雅有であり、「為手||聞き手」の関係が成立つ。しかも「話し手||為手」である。この⑦の用例では為家が雅有の訪問を殊に喜び「給ふ」を使用したのでは

ないであろうか。この用法は「とはすがたり」にも見られる。

⑧ (曙・二条)「なお耐へがたや。せめては内へ入れ給へ。」

この雪やめてこそ」と 卷一 表四・6)

⑨ 明くれば、(曙)「さのみも」とて帰られしに、「立ち出

でてだに見送り給へかし」と 卷一 表四・6)

この用例はどちらも雪の曙が二条に対して懇願している場面であり、話し手の心理的影響を受けていると考えられる。また、

⑩ (ささがにの女)「この有様はなかなかに侍る」とて降

りず。まことに苦々しき心地して、(二条)「わがもとのいまだ新しき衣の侍るを、着て参り給へ。(院ハ)今宵しも大事の事ありて」など言えども、泣くより外の事なくて、手を擦りて、「帰せ」と言ふさまもわびし。(と 卷二 表

四・17)

この場面はささがにの女(傾城)が雨の中一晚中院の召しを待ち、ずぶ濡れになっているのを見て、二条がひどく同情的になつており、そのことが通常敬語で待遇されない傾城に対して「給ふ」を用いたのである。ここでも話し手の心理が動いたと考えられる。

⑪ (二条)「都の方より、結縁しに参りたる」と言へば、

(宮人)「うちまかせては、その御姿は仰り申せども、く

たびれ給たる気色も、神許し給ふらん」とて、内へ入れてやうやうにもてなして、(と 卷四 表四・33)

ここでも宮人の二条に対する同情的な心理が「給ふ」で表されていると言える。

⑫ (絵具ヲ)持て来たれば、描きぬ。(主ハ)喜びて、「今

はこれに落ちとどまり給へ」など言ふも、をかしく聞くほどに、この入道とかや来たり。(と 卷五 表四・41)

ここは広沢入道が来るというので村中あげて準備をするのに障子の絵を二条が描いたのを主がたいそう喜んだ場面であり、主の喜びが「給ふ」に結びついたと言える。

右に雪の曙が二条に対して「給ふ」を用いているとき、話し手の心理的影響を受けていると述べたが、次のような用例がある。

⑬ 「心強くも隠れ給へども、神の御しるべは、かくこそ母

ね参りたれ」と言ふを見れば、雪の曙なり。(と 卷二

表四・15)

この場合曙が心理的影響を受けたとも思えない。ここでは「為手」聞き手」であり、渡辺氏が「会話文では「話し手」為手」の上下関係で尊敬語が使われることもある」(前出論文)と述べておられるが、「とはすがたり」においても「為手」聞き手」

の場合、「話し手V為手」の関係でも、「給ふ」が用いられる  
 と言えるであろう。

⑬ (院)「……柿本僧正、染殿後の物怪にて、あまた仏菩薩の力尽し給ふといえども、終にはこれに身を捨て給ひにけるこそ。志賀寺の聖には、(京極御息所ガ)「ゆらく玉の緒」と情を残し給ひしかば、すなはち一念の妄執を改めたりき。(と 卷三 表四・19・20)

これは前半は「今昔物語集」に、後半は「俊頼髓腦」「太平記」に見える説話であり「地の文」同様に「とはずがたり」では、歴史上の人物や、小説の登場人物に対しては「会話文においても、「給ふ」を用いるようである。ここでは、その話し手が後深草院であることにも注意したい。

後深草院が齋宮や有明の月といった皇族に対して「給ふ」を用いた例(表四・2、18、21)があり、「会話文」では院でも、皇族に対しては敬語を用いたと考えられる。

表四・12は聞き手である後深草院に対し使者が二条に「給ふ」を用いており、「聞き手V為手」で不自然であるが、福田氏の頭注に、「使者の作者に対する敬意とする通説に従う」とある。使者は二条の使いであり、聞き手が後深草院であっても二条に対して敬意を払ったとするならば、絶対敬語の用例と考え

られる。

表四・27の用例は、為手は有明の月と二条との子で、話し手は作者とも世間の人々ともとれる。聞き手はつきりしないが、話し手を前者ととれば独言あるいは二条に使える者が聞き手となり、後者ととれば世間の噂となるであろう。

「消息文」についても「会話文」と同じく「為手||説手」の場合、「書き手V為手」であつても敬語待遇されることがある。(表四―二・2)

表四―二

給ふ(消息文)と4例

卷二(4)			卷
3	*2	1	書き手
二条	隆顕	有明の月	為手
隆顕	二条	仏	受け手
		有明の月	説手
隆顕	"	二条	数
1	2	1	備考
立ち寄り	出で 捨て	垂れ	

表四―三

給ふ(和歌・縁起)と6例

卷	話し手	為手	受け手	聞き手	数	備考

卷四(縁起)(4)	
2	1
日本武命	女房(如 巻)
4	2
参り・低き 打ち出で 下り	飛び去り

以上「し給ふ」について纏める。

「地の文」

(1) 両作品においてAランクからFランクまで使用されている。ただし、「とはすがたり」でa1の天皇については過去の天皇(歴史上の人物)である。

(2) 「とはすがたり」では、歴史上の人物に対して多く使用される。「飛鳥井雅有日記」ではその傾向は見られない。作者の心理的影響を受けると考えられる。また、両作品ともに神仏に対して多く使用されている。

「会話文」

(1) 両作品ともに「為手し聞き手」の場合、「話し手し聞き手」であっても話し手の心理的影響によって「し給ふ」が使用される。「とはすがたり」では心理的影響がなくても使用される例がある。

(2) 後深草院であっても皇族には敬語待遇をしている。

(3) 使用人など身分の低い人は、聞き手が身分の高い人物であっても自分の主人に対しては敬語を用いる。

(4) 「とはすがたり」には聞き手のはっきりしない用例がある。

「消息文」

(1) 「会話文」の(1)と同じく、「為手し聞き手」の場合、「書き手し聞き手」であっても敬語待遇される。

「和歌・縁起」

(1) 「とはすがたり」で縁起に六例、神仏に対する用例が見られる。

(II) 「し給ふ(させ)給ふ」

まず「地の文」(表三参照)では両作品ともにA・Bランクに用いられているが、「とはすがたり」ではBの神仏に用いられた例が一例ある。

① 一昨年より春日の御櫛、京に渡らせ給ふが、「この程御掃座あるべし」とてひしめくに、(巻三)

「飛鳥井雅有日記」ではAランクでもa1の天皇に用いた用例がある。

② 東宮の朝餉の御童にて二人づつの花つくの勝負の御鞠あ

り。右(雅有方)勝ち参らせて、やがて八重桜の枝に梅の  
 数珠を懸けられて、下給はりぬ。引籠めがたくて、内へ持  
 ちて参らせたれば、「殊更色も匂ひも添ひたる御心地す。」  
 とて、御手づから取らせ給て入らせおはしませぬ。(飛

春) 次では、「いせ給ふ」と、「いせおはします」を併用している。  
 a6の人物については、  
 「とはずがたり」

卷一 東二条院(二例)、後嵯峨院(四例)、齋宮(二例)、  
 大宮院(四例)、後嵯峨院の皇子達(二例)、姫宮(遊義門  
 院)(二例)。

卷二 龜山院の姫宮(二例)。  
 卷三 遊義門院(二例)、大宮院(二例)、東二条院(二  
 例)。

卷四 惟康親王「將軍」(二例)。  
 「飛鳥井雅有日記」

春 後嵯峨院(二例)、准后(二例)  
 となっている。後嵯峨院の皇子達や龜山院の姫宮等、位の低い  
 皇族にまで及んでいるが、それらは少数であり、大宮院や後嵯  
 峨院等の用例が大部分をしめている。「い給ふ」より敬度は高

いと言えぬ。

また後半の卷四、卷五で急に用例が減っていることに注目し  
 たい。

表五  
 せ(させ)給ふ(会語文)と17例

卷三(3)		卷二(4)				卷一(5)					卷
11	10	*9	8	7	*6	5	*4	3	2	*1	
二条	龜山院	中間	有明の月	龜山院	後深草院	人	乳母	雪の曙	大宮院	後深草院	話し手
齋宮	後深草院	隆顯	"	"	後深草院	齋宮	二条	"	後深草院	東二条院	為手
				龜山院							受け手
齋宮	後深草院	雪の曙	二条	後深草院	二条	大宮院	"	二条	後深草院	有明の月	聞き手
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	数
入ら	寝させ	入ら	わたら	見	知ら	入ら	入ら	忌ま	入ら	見え	備考

卷五(3)			卷四(2)		
17	16	15	14	13	12
人々	人々	父の霊	祝詞の師	二条 (後深草院)	水 仕 (後深草院)
東二条院	"	後深草院	草薙剣	(後深草院)	二条
					後深草院
"	人々	二条	皆人	召次	二条(二条)
1	1	1	1	1	1
御事切れ	なら	持た	入ら	渡ら	参ら

次に「会話文」について見ていく。「飛鳥井雅有日記」では用例は見られなかった。「とはすがたり」では一七例見られるが、その中には、二条や隆顕に対して用いられた例がある。

- ③ (乳母↓二条)「秋の夜長く侍る。彈蒔しなどして遊ばせ侍らんと、御父申す。入らせ給へ」と 卷一 表五・4)

- ④ (中間↓曙)「夜べ、九条より(隆顕)大納言殿(二条ノモトニ)入らせ給ひて候ひしが、今朝また御使に参りて掃り候ふが、……」(と 卷二 表五・9)

- ⑤ (承仕)「御所よりにて候ふ。(院)「御扇や御堂に落ちて侍ると御覧じて、参らさせ給へと申せ」と候ふ」と

卷三 表五・12)

③④は話し手と為手との身分差が大きく、話し手は為手に仕える人物である。これは「い給ふ」の所でも述べたが、「い給ふ」の場合の聞き手が後深草院とAランクの人物であったのに対し、⑤では「聞き手」為手であり、「いせ給ふ」の使用が考えられる。また④についても聞き手は雪の曙でありCランクである。逆に考えると、前項の「い給ふ」の表四・12では聞き手がAランクの人物であったために敬度の一段低い敬語が用いられたと考えられるであろう。⑤については、参らさせ給へは「参らす」の未然形+使役の助動詞「す」の連用形+「給ふ」の命令形であろう。これは二重敬語の「いせ給ふ」ではなく「い給ふ」と考えるべきである。またここは二重会話になっている。「い給ふ」の部分には「いと申せ」とある所から、後深草院の直接の言葉と考えられる。とすると「参らさせ給へ」は後深草院が二条に対して用いたことになる。「話し手」為手」の関係になるが、「聞き手」為手」であり、「い給ふ」の「会話文」の(1)となる。

また後深草院が話し手で「いせ(させ)給ふ」を用いている例がある。

- ⑥ 如法愛染の大阿闍梨にて大御室(有明の月)御伺候あり



しを、(院ハ) 近く入れ参らせて、「(東二条院ハ) 叶ふまじき御氣色に見えさせ給ふ。いかがし侍るべき」と申されしかば、(と 卷一 表五・1)

これは東二条院に対して用いられた用例であり、「い給ふ」で述べたように、後深草院でも皇族に対しては敬語待遇をし、しかも「い給ふ」が身分の低い皇族に用いられたのに対し、「いせ(させ) 給ふ」は身分の高い皇族に用いられるようである。

⑦ 夜もすがら、(院)「われ知らせ給はぬ御事。またこの後も、いかなる事ありとも、(二条ヲ) 人におぼしめし落とさじ」など内侍所・大菩薩ひきかけ承るも畏ければ、(と 卷二 表五・6)

ここで「知らせ給ふ」の主語は後深草院であり「話し手」の関係が成立つ。会話の中に「われ」とあることから取次ぎを解していないと考えられる。従つてこの用例は「自敬表現」であると言える。

⑧ 検校などが籠りたる折も開けば、必ず(院ノ) 御幸など言ひ聞かする人も、道の程にてもなかりつれば、思ひも寄り参らせて過ぎ行くほどに、楼門を登る所へ、召次などにやとおぼゆる者出て来て、「馬場殿の御所へ参れ」と(二

条ニ) 言ふ。「誰が渡らせ給ふぞ。(私ヲ) 誰と知りて、さる事を承るべき事おぼえず。あの低人などが事か。」(と 卷四 表五・13)

ここで文脈から言えば、二条は誰ともわからない人物に対して「いせ給ふ」を用いていることになるが、この人物は後深草院であり、文章にする時に、二重敬語の「いせ給ふ」で待遇したと考えられる。

「消息文」には用いられていない。

以上「いせ(させ) 給ふ」を纏める。

「地の文」

(1) 使用対象はおもにA・Bランクの人物である。「とはすがたり」には神仏に用いられた用例があり、「飛鳥井雅有日記」ではa1の天皇に用いた用例がある。

(2) 「い給ふ」より敬度が高い。

(3) 「とはすがたり」では後半部で用例が激減している。

「会話文」

(1) 「飛鳥井雅有日記」には用例がない。

(2) 「とはすがたり」においてC・Eランクの用例が見られる。

(3) 使用人が主人のことを述べる時は、敬度の高い「いせ

(させ) 給ふ」を用いる。

ただし聞き手が身分の高い人物であると、敬度の一段低い敬語を用いる。

(4) 後深草院は身分の高い皇族には、「いせ(させ) 給ふ」を用いる。

(5) 後深草院の「自敬表現」がある。

(Ⅲ) 「いせ(させ) おはします」

「地の文」では使用対象は「とはすがたり」ではa1・a5以外のAランクと神仏であり、「飛鳥井雅有日記」ではa1・a2・a3のみである。かなり敬度の高い語だと言えらる。「とはすがたり」のa6の使用対象は、

卷一 後嵯峨院(二例)、東二条院(二例)、大宮院(二例)、  
例、京宮(二例)。

卷四 惟康親王「將軍」(二例)。

卷五 東二条院(六例)、遊義門院(二五例)、伏見院(七例)、  
例、後宇多院(四例)、皇室(三例)。

となっていて身分の高い皇族だと考えられる。また法皇に対する使用が目立つことから考えると、「いせ(させ) 給ふ」より敬度が高いと言えらる。

① 既に(將軍ノ) 発たせおはします折節、宵より降る雨、

ことさらその程となりてはおびたたく、風吹き添えて、物など流るにやとおほゆるさまなるに、時違へじとて出し参らするに、御輿を逐といふ物にて包みたり。あさましく目も当てられぬ御やうなり。(中略) 程経れば、(將軍方) 鼻かみ給ふ。いと忍びたるものから、たびたび聞ゆるにぞ、

御袖の涙も推し置られ侍りし。(と 卷四)

これは惟康親王に対して用いられている。この作品の中で作者は惟康親王に対してかなり同情的であり、この用例でも武士の親王に対する態度に憤慨している場面での使用と考えられる。

①の用例では前に「いせおはします」を用い、後ろでは「い給ふ」を用いていることに注意したい。他の場面での惟康親王の待遇を見ると、「させおはします」が二例、「い給ふ」が二例(共に①の用例を含まない)、「いせ(させ) 給ふ」が一例ある。他に將軍として登場する宗尊親王や久明親王にはすべて「い給ふ」で待遇されているのに対し、惟康親王には「いせおはします」や「いせ給ふ」を用いている。それらを見てみると、二条の眼前において起こっている出来事であり、一層二条の親王に対する同情心が強くなっている場面であることがわかる。従って前にも述べたが、「地の文」においても作者の心理的影響を

受けると考えられる。

「いせ(させ) 給ふ」は、用例が前半に多く、後半に少なかつたが、「いせ(させ) おはします」はその逆で後半に多くなっていることが表三を見るとわかる。「いせ(させ) おはします」は平安後期に発生した語であり、『今昔物語集』から用例が見られ、「いせ(させ) 給ふ」とともにごく敬度の高い語として使用されている。しかし、『平家物語』になると、「いせ(させ) 給ふ」の敬度が低下しており、『徒然草』には用例は見られず、『謡曲』では「いせ(させ) おはします」も敬度が低下するようである。近世以後の作品には用例は上がっていない。このことから、「いせ(させ) おはします」は中世に用いられた語であり、「とはすがたり」や『飛鳥井雅有日記』では「いせ(させ) おはします」が「いせ(させ) 給ふ」に代わろうとする過渡期であると考えられる。「とはすがたり」の前半に用例が少なく、後半に多いのは、前半では作者二条は宮廷生活を送っており、しかも後深草院の寵愛を受け宮廷は彼女にとつては近しい存在であり、後半は尼になり、諸国を旅し、宮廷とは掛離れた生活を送るため、遠く懐かしい存在であったためであろう。ここでも作者の心理的影響により、より敬度の高い「いせ(させ) おはします」を用いるという現象が起こつたと

考えられる。

「飛鳥井雅有日記」においても「いせ(させ) 給ふ」  
 へ「いせ(させ) おはします」と言える。

表六

「おはします(会話文)と2例

巻五(1)	巻一(1)	巻
2	1	
父の霊	雅忠	話し手
"	後深草院	為手
		受け手
二条	後深草院	聞き手
1	1	数
いませ	入り	備考

表七

「いせ(させ) おはします(会話文)と14例

巻四(1)	巻二(2)	巻一(2)	巻
6	4	*2	
実兼	二条	"	話し手
後深草院	"	"	為手
			受け手
二条	東の御方	"	聞き手
1	1	1	数
頼みなく	入ら	休ま	備考
	出で	開か	
	なら		

卷五(9)						
13	12	11	10	9	8	7
"	人々	男	"	"	二条	父の靈
遊義門院	院の御影	後深草院	遊義門院	"	後深草院	遊義門院
二条	人々	二条	遊義門院	男	父の靈	"
1	1	1	2	1	1	1
立ち帰ら	入ら	参ら	下り 踏ま	先立た	渡ら	出で

表七―二

くせ(させ) おはします(消息文) と1例

卷二	卷一
・1	
久我尼	書き手
久我尼	為手
後深草院	受け手
隆顯	読手
1	数
おほえさせ おはしまし 候へ	備考

「会話文」(表七)では、「とはすがたり」の用例のみであるが、敬度はやはり高くAランクのみである。「会話文」でも、「くせ(させ) 給ふ」より敬度が高いと言える。次の二例は後深草院の「自敬表現」と思われる。

② (父雅忠方)「.:」由を奏し申さるる程なく(院ハ)や

がて引き開けて入らせ給ふほどに、(中略)(院)「御幼くより慣れ仕りしに、今はと聞かせおはしましつるも悲しく、今一度とおほしめし立ちつる」など仰せあれば、(と 卷一 表七・一)

③ (雅忠方)泣く泣く奏せらるれば、(院ハ)「程なき袖をわれのみこそ。まことの道の障りなく」など細やかに仰せありて、(院)「ちと休ませおはしますべし」とて、立たせ給ひぬ。(と 卷一 表七・二)

また惟康親王に対して用いた例もある(表七・5)。ここでは聞き手はつきりしないが、話し手は惟康親王に仕える女房であり、敬度の高い敬語が使用されることは前に述べた通りである。

「消息文」では、「とはすがたり」で次の一例があるだけである。

④ 「.:。君の御不覚とこそ、おほえさせおはしまし候へ。

.:。(と 卷一 表七―一・一)

以上「くせ(させ) おはします」について纏める。

「地の文」

(1) Aランクを中心とする最高敬語である。Aランクでも

法皇や女院、東宮など敬度がかなり高い。「とはすがたり」では神仏の用例がある。「いせ（させ）給ふ」より敬度が高いと言える。

(2) 「い給ふ」で待遇される人物に対して作者の心理的影響を強く受けると、「いせ（させ）おはします」が用いられる。

(3) 「いせ（させ）おはします」は中世に用いられた語であり、「とはすがたり」や「飛鳥井雅有日記」は「いせ（させ）給ふ」に代わろうとする過渡期であると考えられる。

#### 「会話文」

(1) 「とはすがたり」の用例のみである。

(2) 後深草院の「自敬表現」がある。

(3) 「い給ふ」のように「話し手V為手」の用例はない。

#### (Ⅳ)「る・らる」

「る・らる」は「い給ふ」より敬度が低いと言われているがここでは「い給ふ」との関係と敬度について見ていきたい。深町氏は、「い給ふ」は平安時代、貴族社会の女性を中心に多用されておられ、「る・らる」は、平安時代の変体漢文特用語として、主に武士、貴族、僧侶などに使用されていた。記録体の文章に多く見られる。「源氏物語」において、明確な尊敬は「対話」

に偏在する程度で、しかも話し手の大半は①男性②老女③くせのある人物に偏向し、理性的女性は一、二にとどまる。「るらる」が各層を通じて広く使用されるようになるのは、一一世紀後半の院政期以降である。」と述べておられる。「とはすがたり」や「飛鳥井雅有日記」は共に一三世紀の作品であり、「るらる」が多用された時代であるが、前代からの特徴が現れていると思われる。表三―一を見るとき、「地の文」において「とはすがたり」では「い給ふ」と「る・らる」はほぼ同数であるのに対し、「飛鳥井雅有日記」では「い給ふ」の一八例に対し「る・らる」は二三〇例と約七倍になっていることがわかる。またその対象はどちらも上は天皇から下はフランクにまで及んでいる。下への広がりを見ると、「る・らる」は「い給ふ」より敬度が低いと言える。しかし「い給ふ」に天皇の用例が見られない（「とはすがたり」の一例は「い給ふ」の所で述べたが、過去の人物に対しての使用である）が、「る・らる」には「とはすがたり」に五例、「飛鳥井雅有日記」に二二例見られる。「平家物語」においても、天皇を「る・らる」での一重敬語で敬った例が一〇〇例を超えている。逆に神仏に対しては「とはすがたり」に一例あるだけである。

① まことや、小朝熊の宮と申すは、鏡造の明神の天照大神

飛鳥井雅有日記(5)			卷
3	2	1	
為家大納言	東宮	雅有	話し手
齋宮	"	東宮	為手
			受け手
"	雅有	東宮	聞き手
1	1	2	数
言はる	行はる	下さる 留めらる	備考

と僧に多く、「し給ふ」よりも少し敬度が低いと思われる。  
 表八  
 る・らる(会話文)と32例  
 飛5例

の御姿を写されたりける御鏡を、人が盗み奉りてとかや、  
 (と 卷四)  
 逆に「し給ふ」は神仏に対する使用が多く、神仏は「し給ふ」で待遇されると言える。  
 下限の位ランクについては、  
 「とはすがたり」  
 卷一 雅忠の北の方、乳母、僧達、道朝僧正  
 卷二 隆退僧正、真願望、人々  
 卷四 故頼朝大將、平入道、寂円房、信如房  
 「飛鳥井雅有日記」  
 阿仏尼(五例)、法眼良珍(二例)

卷二(16)											卷一(2)			
18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4
隆顯	真願望	二条	姿季大納言	"	"	近衛大殿	龜山院	"	"	"	"	後深草院	中納言殿 (東二条院)	女房
後深草院	雷の暁 隆顯	"	後深草院	二条	岡屋の殿 下	後深草院	後嵯峨院	朱雀院	後深草院	龜山院	公卿達	大宮院	後深草院	雅有
二条	"	二条										後深草院		後深草院
"	二条	公卿達	"	"	"	後深草院	人々	龜山院	公卿達	龜山院	公卿達	二条	後深草院	"
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
尋ね申さる	申さる	打たせらる	並べ揃えらる	捨て果てらる	思はる	直さる	定め置かる	なさる	贈はせらる	おろさる	一同せらる	申さる	もてなさる	申さる

卷三(10)

*31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19
後深草院	二条	大宮院	稚児	楊梅中將 兼行	隆親	後深草院	稚児	後深草院	近衛大殿	後嵯峨院	公卿達	隆親(兵部卿)
後深草院	"	東二条院	有明の月	後深草院	東二条院	"	"	有明の月	後深草院	近衛大殿	隆顯	二条
	准后	大宮院	稚児	兼行	隆親	後深草院			龜山院	"	"	後深草院
二条	大宮院	"	"	"	"	"	"	二条	後深草院	近衛大殿	隆顯	"
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
召さる(乗)		申さる				仰せらる	置かる	立たる	参らせらる	はぐくみ参らせらる		噴ひ申さる(2)
	(2)				(4)							

卷五(1)	卷四(3)		
35	34	33	32
"	人々	尚良	二条
遊義門院	真喜僧正	二条	東二条院
			二条
人々	"	二条	龜山院 大宮院
1	2	1	1
召さる	停めらる せらる	祝はる	(2)

「会話文」では、「飛鳥井雅有日記」に五例あり、「い給ふ」が二例で、「いせ(させ)給ふ」「いせ(させ)おはします」の用例がなかったことを考えると用例数は多いと言える。「とはずがたり」では、「い給ふ」が五六例であったのに対し、三二例と少なくなる。中世においても「る・らる」はどちらかと言えば男性が用いる語であったようである。また「る・らる」が記録体特有の語であったことを考えると、「飛鳥井雅有日記」が和文体ではあるが記録体的要素を持っていたことを裏づけると言える。

右の深町氏の説で「源氏物語」の対話の話し手は①②③と偏りがあると述べたが、「とはずがたり」でもやはり男性に多い。しかし、二条や大宮院、真願堂などの用例もわずかなが見られ、高貴で教養ある女性の使用もあったと思われる。

② 女院（大宮院）の御方さまも（後深草院ト）うちとけ申

さるるも事もなかりしを、この頃は常に申させおはしまし  
などするに、「またとかく申されんも」とて（院ハ）入ら  
せ給ふに、（と 卷一 表八・6）

この例は主語を大宮院ととつてゐるが後深草院ともとれる。後  
者にとると院の「自敬表現」となる。

③（院）「とは何事ぞ。わが御身の訴訟にて贖はせられ、  
また御所に御贖ひあるべきか」と仰せあるに、（と 卷二  
表八・9）

これは主語を後深草院ととれば「自敬表現」であり、二人称と  
とれば受身となる。

④ 御鞠果てて、酉の終ばかりにうち寝みてゐたる所へ、  
（院ハ）ふと入らせおはします。（院）「只今御舟に召さる  
るに、参れ」と仰せらるるに、（と 卷三 表八・31）  
これは院の直接の言葉であり、「自敬表現」である。

稚児や普通の人々が用いた例もわずかだがあり、「給ふ」  
と用法的にはかなり近いと思われるが、話し手に制限があり、  
為手のランクが「給ふ」よりも高いように思われる。また  
「地の文」と同様神仏に対しての用例はない。

『飛鳥井雅有日記』においても、話し手が女房である例が一

例ある。

⑤ 女房、「今日御鞠始めなり。御師匠の身ながら唯去らむ  
こと、本意なかるべし。且は、院の御方よりも頻に仰せあ  
り。如何様にも立つべし。鞍の所望は新院の御計らひにて  
あれば、かなはずは、常盤井殿の御所にてこそ仔細は申さ  
れぬ。……」（飛 春 表八・4）

これは「自敬表現」とも見られるが、女房を解しているとも考  
えられる。

「とはすがたり」では「消息文」に二例見られる。

表八一—二

る・らる（消息文）と2例

卷三	卷二	卷一			
*2	1		書き手	為手	受け手
東二条院	隆顕	二条		有明の月	読手
東二条院				二条	数
				隆親	備考
				1	いとひ申さる
					おほしめさる

⑥（二条ガ）院の御方奉公して、この御方（東二条院）を  
ばなきがしろに振舞ふが、本意なくおほしめさるるに、す  
みやかにそれ（隆親）に呼び出して置け。故典侍大もなけ  
れば、そこに計らふべき人なれば」など御自らさまさまに



書かせ給ひたる文なり。(と 卷三 表八一・二・二)

「自ら書かせ給ふ」とあるからこれは「自敬表現」ととれる。

また「飛鳥井雅有日記」では和歌の注として「る・らる」が使用されている。(表八一・三)

表八一三

る・らる (和歌・縁起) 飛2例

飛(歌注)(2)	卷	話し手	為手	受け手	聞き手	数	備考
2	1		阿仏尼			1	よまる
		月華門院				1	立ち寄らる

以上のことから「る・らる」は「い給ふ」とほぼ同様に使用されているが、次の点で違つと言える。

「地の文」

(1) 「い給ふ」より使用対象の上限は高く天皇にまで及んでいる。神仏に用いた用例はない。下限で考えると「い給ふ」より敬度は低い。

(2) 記録体に多く使用される。

「会話文」

(1) 主として男性に多く用いられるが、教養ある高貴な女性

にも使用される。

(2) 為手のランクは「い給ふ」よりも高いと言える。神仏に對して用いた用例はない。

「消息文」

(1) 「とはすがたり」では「自敬表現」が使われている。

「和歌・縁起」

(1) 「飛鳥井雅有日記」に和歌の注に用いた例がある。

注一 若林俊英 「とはすがたり」の敬語 — 主語尊敬の助動

詞・補助動詞と「御あり」「御なる」の尊敬語 「湘南文学」一四 昭五五年三月

宮内健治 「とはすがたり」の尊敬語 「解釈」二六・

七 昭五五年七月

新免理恵 「とはすがたり」における敬語 「山口国文」六 昭五八年三月

川崎加代 「とはすがたり」の二重敬語「せ給ふ」「せお

はします」について 「高知大國文」一六 昭六〇年

青柳好信 「敬語の研究(四)」「とはすがたり」の敬

語 「栃木県立足利高校研究収録」九 昭六一年

注二 宮内健治 「とはすがたり」の尊敬語 「解釈」二六・

七 昭五五年七月

注三 中田祝夫監修 「古語大辞典」小学館 昭五八年一二月

桜井光昭 「敬語論集 — 古代と現代」 「付 作品別

注四 古典の敬語表覽」

深町幸子 「平家物語」における「る・らる」「給ふ」につ  
いて」 『九州大谷国文』一六 昭六二年